

多様なレベルの学習者を 対象とした漢字クラスの開発

Development of the kanji class for various skill-levels of Japanese learners

藤田 恵
FUJITA Megumi

〔要旨〕

本稿は、2017年度に新規開講された漢字クラスについて報告するものである。このクラスは、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めることを目的とし、同時に「立教漢字検定」の対策となるように開発を行った。また、本クラスは履修者の日本語レベルを問わず、どのレベルであっても履修することができるという特徴を持つ。本稿では、多様な日本語レベルの学生が一つの教室で学ぶ漢字クラスの教材開発とクラス活動の設計の過程を整理し、さらに教師の視点からクラスのふりかえりを行う。そしてその結果から、次年度に向けたクラスの改善点を明らかにする。

〔Abstract〕

This study introduces a kanji class newly opened in 2007. The purpose of this class is to deepen knowledge regarding the meaning of kanji and the manner in which to use kanji vocabulary. Simultaneously, we developed this class for it to become a measure for the Rikkyo Kanji Certificate Examination. Furthermore, this class has certain characteristics that enable students at any level to attend it regardless of their Japanese language skills. This paper is aimed at organizing the process of designing the class' activity and the development of teaching materials such that students at different levels of Japanese language skill acquisition can learn in one class; the paper also aims at reviewing the class from a teacher's perspective. The results of this study indicate an area of improvement for the class.

Key word: 漢字クラス、カリキュラム開発、教材開発、レベル差、ピア・ラーニング



kanji class, curriculum development, teaching materials development, differing degrees of mastery, peer learning

1. はじめに

本稿は、2017年度より新規に開講された漢字クラスについて報告するものである。

日本語教育センターでは、日本語科目の履修者に対して質問紙や Web を使用し、授業に関するアンケート調査を実施しているが、科目展開に関する事項では漢字学習が行えるクラスの開講を求める声が以前から挙がっていた。漢字に関するプログラムとして、日本語教育センターでは、初級クラスの授業内で希望者に対して漢字クイズを実施している他、全レベルの学生を対象とした独自の「立教漢字検定」を1年に4回実施している。これらは、学生の漢字学習に対するニーズの一部を満たすものではあるが、受験当日までの準備を学生の自主学習に任せるものであることから、前述のような声が挙がっていたものと思われる。今後、大学の方針として留学生数の大幅な増加が見込まれており、漢字学習に対する学生のニーズもより高まることが予想される。

以上のような背景があり、日本語教育センターのプログラムのさらなる充実を目指し、漢字クラスを開講するに至った。本稿では、新規開講となった漢字クラスの開発過程を整理し、授業のふりかえりと次年度への課題を示すこととする。

2. 漢字クラスの開発

漢字クラスの開発にあたって、授業の目標を「漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける¹⁾」こととした。また、「立教漢字検定」との連携を図り、授業の内容に検定対策を含め、履修者全員に「立教漢字検定」の受験を課すことにした。「立教漢字検定」については次節で後述するが、この検定は学生の日本語科目のレベルを問わず、どのレベルであっても受験することができる。そのため、漢字クラスにおいても履修資格として日本語科目のレベルは制限せず、全レベルの学生を対象とすることとした。

2.1 立教漢字検定

「立教漢字検定」は、前述のとおり、日本語教育センターが独自に運営している検定試験であり、漢字の読み、字形の認識、漢字の意味といった漢字の知識を問うている。

レベルの設定は、初級、中級、上級の3レベルであり、初級レベルの中にはさらに段階的に、B1(上位)～B6(下位)の6つのレベルがある。中級と上級の中には段階的なレベルはなく、「Prefix, Suffix, Building, House, Transportation」(中級 I-A)、「身体、保険医療、趣味、生活」(上級 A-A)といった分野ごとに出題範囲が設定されており、それぞれ A～G の7分野が展開されている。受験を希望する学生は、自身の日本語科目のレベルに関係なく、初級から上級まで合計20のレベル・分野を自ら選択し、受験することができる。

2.2 教材開発

漢字クラスは、「立教漢字検定」との連携を図り、授業の内容に検定対策を含めることとした。そこで、検定の受験者に配付している独自の漢字テキストを本クラスの教材の一つとして選定した。授業で使用する主教材は、この漢字テキストに沿ったワークシートを用いることとし、これを新たに作成することとなった。新たに開発するワークシートは、3年間で全てのレベル・分野のものを完成させる計画とし、初年度である2017年度は、初級B1～B6の6レベルの開発を行った。

まず、学期中に2回ある「立教漢字検定」のそれぞれの受験日に準備が間に合うよう、半期で1レベル分の出題範囲が終えられるように1回の授業で扱う漢字の字数を設定した。1学期14回の授業のうち、オリエンテーションとまとめの回を除く12回を二分し6回で1レベルの学習を終える計画である。また、検定の受験日直前の回には出題範囲の総復習を入れることとし、5回で出題範囲が終えられるように1つのワークシートで扱う字数を設定していった。初級6レベルの出題範囲は、レベルごとに異なり66字～94字である。そのため、授業で毎回扱う字数は15字～20字程度となった。

次に、ワークシートの問題形式の設定では、「立教漢字検定」の対策となるように検定の問題形式を取り入れ、さらに授業の目的にある漢字語彙の拡充と使い方の練習が行えるようにした。ワークシートの問題形式は、全レベル共通で次のとおりである。問題Ⅰ～Ⅴの括弧内は、ワークシートでは空欄となっており、履修者が選択肢を入れたり、記述をしたりする部分である。

問題Ⅰ：漢字の字義を選ぶ問題。

(例) 関〔to connect, relate, person in charge〕

問題Ⅱ：漢字語の読みを書き、意味を選ぶ問題。その漢字を使った他の語も書く。

(例) 学生くがくせい>〔student〕【大学、学校、生まれる】

問題Ⅲ：漢字語の読みを書く問題。複数ある語の関係性も考える。

(例) 夫、妻、主婦、主人、夫婦、妻子、身内

問題Ⅳ：下線部の漢字と同じ読みをする漢字を書く問題。

(例) 先生【千、洗、選、専】

問題Ⅴ：文中にある語の漢字を書く問題。

(例) 私のおととは、教育かんけいの仕事をしています。

文作成：学習した漢字語のリストを作り、意味と文を書く。

(例)	一個 いっこ	one (small thing)	りんごを一個ください。
	牛乳 ぎゅうにゅう 配達 はいたつ	milk to deliver	牛乳を配達するアルバイトをしています。

履修者にはこのワークシートを解くための準備学習が行えるように、毎回扱う漢字の範囲を示すようにし、その範囲を漢字テキストで予習していただくことを促すことにした。

2.3 クラス活動の設計

漢字クラスは、日本語教育センターが運営している他の日本語科目とは異なり、履修者の日本語レベルを問わず、全レベルの学生が履修することができる。さらに、履修者は「立教漢字検定」の受験レベルを自身で選ぶことになるため、検定の受験レベルもさまざまとなる。したがって、クラス活動は、日本語習熟度と検定の受験レベルが異なる学生たちが一つの教室で漢字学習ができるように設計した。表1に1回の授業時間90分で行うクラス活動の計画を示す。

表1 漢字クラス クラス活動の計画

	時間配分	活動の範囲	活動の内容
①	20分	全体	「漢字発見」の発表
②	60分	個別	ワークシート
③		レベル別	ワークシート、教え合い
④	10分×レベル数	レベル別	教師のフィードバック、課のまとめ
⑤	10分	全体	スタンプカードへの押印、ふりかえり

クラス活動を行う範囲は、全体、個別、レベル別に分け、一つの教室で全員が共に学ぶ時間と、教師が履修者のレベル差に柔軟に対応するための時間、そして履修者同士が教え合いを行う時間をとるようにした。

①の活動は、履修者の受験レベルの出題範囲にある漢字を使った語を教室外で探し（漢字発見）、その成果を発表するものである。実際の漢字語の使用場面を能動的に発見することにより、漢字学習の動機づけを図った。そして、その成果を教室全体に発表することにより、他の履修者も漢字語の使用場面を多く知り、漢字への興味が深まることを期待している。

②と③の活動は、予習してきた漢字の理解度を確認するために、ワークシートを進めるものである。初めに個別で進めて自身の理解度を確認し、その後同レベルを受験する履修者同士で教え合いをする時間をとることにした。

④は、②と③の活動と並行して、教師が教室内を回り、質問への対応を行う他、ワークシートの問題の中で漢字テキストでは確認できない部分への解答と添削をする時間である。また、履修者のレベル差への対応もこの間に行う。

⑤は、履修者自身が検定の実施日までの学習進度を管理できるように、取り入れたものである。履修者には「立教大学漢字検定 スタンプカード」を配付し、「漢字発見」と各課のワークシートの完了を教師に報告後、カードにスタンプを押すという手順で進める。

以上の①～⑤のクラス活動を開講前に計画し、実際の漢字クラスに取り入れた。

3. 漢字クラスの実施報告

初めて開講された2017年度春学期の漢字クラスの履修者は13名となり、日本語科目のレベルはJ25～J7の初級から上級まで幅広いレベルが混在するクラスとなった。そして、履修者が選択した「立教漢字検定」の受験レベルは、1回目がB2・B3・B5・B6、2回目がB1・B2・B4・B5となり、想定していたとおり、履修者の日本語習熟度と検定の受験レベルが複数あるクラスとなった。

3.1 クラスのふりかえり

2017年度春学期は、13名の履修者に対し、2-2で述べた教材を用いて2-3のクラス活動を行った。

活動時間は、概ね計画通りに進めることができ、学生の進捗を見ても適切な時間が確保できていたようである。②と③の活動については、個別で30～40分かけてワークシートを進め、残りの時間にピアでの活動を行うことにより、ワークシートを完成させることができていた。また、教師もこの間に全レベルのグループを回ることができ、履修者の習熟度を把握することができた。

①の活動では、他科目の配付物、学内の掲示物、日本語の小説やマンガ、道路標識、駅の案内板、飲食店ののぼり、旅行先の石碑等、キャンパス内に留まらず、履修者の日本留學生活の中で目にするさまざまなものから「漢字発見」の報告を得た。このことから、履修者は計画時点で教師が期待した以上に能動的にこの活動に取り組んでいたことがうかがえた。また、全体への発表方法は学期が進むごとに改善を重ね、写真か実物を書画カメラで映し、さらに板書を併用して、漢字語、読み方、意味を示し、必要に応じて英訳も付すことで、レベル差に配慮した発表ができるようになった。履修者からはテキストの例にはない新たな漢字語が報告されることも多く、全体への発表をしたことで履修者全員がその成果を共有することができた。したがって、「漢字発見」の活動は、授業の目的である「漢字語彙の拡充」と「漢字語彙の使い方に関する知識を深める」ことにも貢献したと思われる。

②と③の活動は、履修者の習熟度を確認する時間として有効であった。この時間は、まず漢字テキストを見ずにワークシートを進めるように指示していた。そのため、理解不足である部分は空欄となり、それが明示されることで、履修者が自身の理解度を把握することに役立ったと考えられる。また、③のピアでの活動によって、自身の理解度を他者に披露する機会があったため、これがより促進されたものと思われる。館岡(2007)は、ピア・ラーニングの特徴を「学習の『過程』を『共有する』」ことと述べており、本クラスの③の中でもその場面が多く見られた。活発に③が行われているグループでは、漢字語の読みや字形の覚え方、実際の使用方法等の共有が行われており、他者とのやり取りの中で新たな気づきを得ることもあったようである。一方で、教師の視点からではあるが、積極的に取り組む姿勢となれなかったためか、一方がもう一方に向かって解答を教えるだけの時間となっているグループも見られた。よって、③の活動は、レベル差

のある学生間において一定の効果は期待できるが、履修者に活動への理解を深め動機づけを行うという点に改善の余地が見られた。

④は、②と③で履修者が確信を得られなかった部分に教師が解説をする時間となった。特にワークシートの「問題Ⅳ」と「文作成」の確認を求められることが多かった。教師にとっては履修者の進捗を把握する機会となり、履修者に予復習を促す材料を得る時間ともなった。また、④は履修者の日本語習熟度の差への対応という側面もあり、漢字テキストにある例文の解説や漢字語の使用法の提示等を、履修者の日本語習熟度に合わせて個別に解説する機会が多くあった。

⑤は、履修者の学習進度の管理と課題を進めることへの動機づけに有効であった。計画当初は、学習進度の管理について、履修者側の効果を期待するものであった。しかし、実際は履修者のみでなく、教師にとっても管理の助けとなるものであった。本クラスは「立教漢字検定」の対策という役割もあることから、履修者の自主学習が進むようにワークシートの回収を行わなかった。そのため、各課の課題の完了と未完了が一覧できるスタンプカードは、教師が履修者の課題への取り組みを評価する際の助けともなるものであった。また、出欠席の状況等で課題が進まなかった履修者から、後日課題の完了が報告され、カードにスタンプを押してほしいと言われることが多くあった。課題が未完了であるという記録が履修者の手元に常にあったことが、課題を進めることへの動機につながったと思われる。

3.2 次年度に向けた課題

3-1で述べたクラス活動の他に、本クラスの改善に向けて、成績評価と「立教漢字検定」との連携についてふりかえる。

まず、成績評価については、履修者の課題の達成度は評価することができたが、さらに予復習の程度を確認するための課題の必要性を感じた。本クラスは、漢字の知識を深めることを目標にしており、さらに予復習を促していることから、これらの確認を授業内に行い、評価する必要があると考える。

次に、「立教漢字検定」との連携については、日本語教育センター事務局への検定の申し込みと漢字テキストの受領を履修者に任せていたことから、ワークシートの進捗と漢字テキストの受領のタイミングが合わないことがあった。漢字テキストは検定の申し込み後に事務局から受領するものであったため、申し込みの遅れた履修者はテキストがないままワークシートを進める回が出てしまった。これは、履修者の自主学習とクラス活動への参加度に影響を与える事項であるため、早急に改善する必要があると考える。

この2点については、春学期の終了後に改善に向けた方略を検討し、秋学期の授業担当者に引継ぎを行っている。現在開講している秋学期の漢字クラスにおいて、成績評価についてはクイズの実施、「立教漢字検定」との連携については履修者の一斉申し込みと教師からの漢字テキストの配付を行っている。これらの導入によって改善が見られたか、秋学期の授業担当者からのフィードバックを得て、さらに検討を重ねていきたい。

4. おわりに

本稿では、漢字クラスの開発過程を整理し、初めて開講された2017年度春学期の授業担当者によるクラスのふりかえりを行った。3-1と3-2で述べた教師のふりかえりからの課題の一部は、2学期めである秋学期の開講前に改善を行い進めている。その成果を秋学期の授業担当者から得て、さらに改善を加えることを今後の課題としたい。また、教師の視点のみではなく、履修者によるクラスのふりかえりを行い、改善が必要な点を明らかにする計画もある。次年度には「立教漢字検定」の中級、その次の年度には上級の受験者にも本クラスが開かれる予定であり、両レベルの教材開発とクラス活動の設計において、これらの成果は示唆を与えるものになるであろう。今後も授業担当者のふりかえり続け、さらに履修者から挙げられる課題を明らかにし、本クラスのさらなる発展に努めていきたい。

注

- 1) 立教大学日本語教育センター「2017年度日本語科目 講義内容（漢字）」
 < <https://cjle.rikkyo.ac.jp/syllabus/pdf/2017-kanji.pdf> > (2017.11.1 アクセス) より。

参考文献・資料

- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門——創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
 高橋志野（2015）「少人数グループ活動中心の漢字クラスにおけるクラス内ピア意識を高める試み」『日本語教育方法研究会誌』22（2）、26-27
 館岡洋子（2007）「ピア・ラーニング」『日本語教育通信 日本語・日本語教育を研究する』第33回、国際交流基金 < <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/033.html> > (2017.11.1 アクセス)
 立教大学日本語教育センター「漢字検定」 < <https://cjle.rikkyo.ac.jp/kanjitest/> > (2017.11.1 アクセス)

謝辞

漢字クラスの開発にあたって、日本語教育センターの先生がたには多くのご示唆をいただきました。教材開発とクラス活動の設計は丸山千歌先生と共に進め、他の先生がたにはクラス活動の改善のためにご助言をいただきました。また、復習プリントの入力は前教育研究コーディネーターの高嶋幸太さんが担当してくださいました。みなさまのご協力によってクラス開発と授業運営が進みましたことをここに記し、御礼申し上げます。